

## 信 行 要 文 ③

第十一回 法華講夏期講習会 第三期

（平成二十六年六月二十二日）

皆さん、おはようございます。

本年度、夏期講習会の第三期に当たりまして、皆様方には大変お忙しいところを御登山くださり、まことに御苦労さまでございます。

さて本年度は、例年のように、お手元にお渡しいたしましたテキストにより、お話をさせていただきます。

これは、御書のなかから、信行に関する要文を集めたものであります。これまで、第一期と第二期の講習会で講義をしてまいりまして、本日はテキスト五十三行目の第八番『上野殿御返事』から講義をしていきますので、よろしく願いいたします。

### 8 上野殿御返事

かつ<sup>飢</sup>へて食<sup>じき</sup>をねがひ、渴<sup>かつ</sup>して水<sup>みづ</sup>をしたうがごとく、恋<sup>こ</sup>ひて人<sup>ひと</sup>を見<sup>み</sup>たきがごとく、病<sup>び</sup>にくすり<sup>すり</sup>をたのむがごとく、みめ<sup>影</sup>かたち<sup>容</sup>よき人<sup>ひと</sup>、べにしろいもの<sup>紅</sup>をつくるがごとく、法華経には信心<sup>しん</sup>をいたさせ給<sup>たま</sup>へ。さなくしては後悔<sup>ご</sup>あるべし云云。（御書一三六一頁一二行目）

この御文は、テキストに載せた前の二つ、つまり第六番、第七番と同じく『上野殿御返事』の一文であり、前の二つが御書の本文であるのに対して、ただいま拝読いたしました第八番は最後に追伸として記された御文であります。

本抄は、弘安二（一二七九）年四月二十日、日蓮大聖人様が御年五十八歳<sup>おんとし</sup>の時に、南条時光殿に賜った御書であります。

本抄の初めに、竜<sup>たつのくち</sup>口の頸<sup>くび</sup>の座と東条小松原の法難<sup>とうじょう</sup>を挙げられまして、「刀杖<sup>とうじょう</sup>の難」すなわち刀と杖の難に値<sup>つえ</sup>われたことを述べられております。つまり、竜口の頸の座では、大聖人が刀で斬られようとしたのです。それから、東条の小松原の難も、やはり東条景信<sup>かいげのぶ</sup>が大聖人様を刀で殺害しようとしたのであります。この両方の刀杖の難に値<sup>つえ</sup>われたことを述べられておりますので、この『上野殿御返事』は別名『刀杖難事』とか『杖木書』とも称されております。

ここで出てまいります「上野殿」というのは、南条時光殿のことです。南条殿につきましては前回もお話しいたしましたが、本日はまた、新たな方々でありますので申し上げますと、南条時光殿は総本山大石寺の開基檀那であります。

上野殿とおっしゃっておりますが、総本山があるこの場所は、現在は静岡県富士宮市であります。昔は富士郡上野村と言っておりました。皆さんも、よく御親戚の方々を呼ぶときに、巢鴨のおじさんとか静岡のおばさんなどと、土地の名前を取って言うでしょう。ですから、南条時光殿も住んでいる土地にちなんで、上野殿と呼ばれていたのです。

今では、上野という地名は住所から取れてしまいましたが、上野小学校や上野中学校などと、名前は色々なところに残っております。だんだんと地名が変わっていくと、そのうち上野殿とはどういう意味か解らなくなってしまうかも知れませんが、とにかく、昔はこの辺りを上野と呼んでおりましたので、大聖人様も上野殿とおっしゃっているわけですね。

正規の名前は南条<sup>ひょうえ</sup>兵衛七郎次郎<sup>たいらの</sup>平<sup>だいぎょう</sup>時光と言います。また法名を大行<sup>ぎょうぞう</sup>と言ったのであります。南条時光殿のお父さんの名前は南条兵衛七郎で、法名は行増<sup>ぎょうぞう</sup>と言います。その二男であったので、南条兵衛七郎次郎と言うのです。

昔は、このような名前の付け方をしたのでありまして、長男は太郎、二男は次郎、三男は三郎というように、名前を聞けば、だいたいは何番目の子供かが判るような意味がありました。

つまり、時光殿にはお兄さんがおられまして、このお兄さんは南条兵衛七郎太郎と言います。この方は十八歳の時に水死してしまうのですが、お兄さんが亡くなったあと、時光殿は若くして総領となり、上野郷の地頭職を継いだのであります。

ちなみに、一番上のお姉さんは第三祖日目上人のお母さんであります。そして、もう一人の姉は、富士郡<sup>おもす</sup>重須（現在の富士宮市北山）の地頭であった石川新兵衛<sup>むねただ</sup>宗忠に嫁いでおられます。そのように深い縁故があったのであります。

時光殿は、幼いころから大聖人様に帰依し、また日興上人<sup>しけい</sup>を師兄<sup>した</sup>と仰ぎ慕って、純真な信心に励んでおりました。

特に熱原法難に際しましては、時光殿は信者の中心として活躍し、多くの僧俗を助け、外護の任を果たしました。

『上野賢人殿御返事』（上野殿御返事・御書一四二七<sup>ツ</sup>）という御書がありますが、その宛名書きの脇には、

「此は<sup>あつわ</sup>らの事のありがたさに申す御返事なり」（御書 一四二八<sup>ツ</sup>）と、大聖人様がお認<sup>した</sup>めになっております。つまり、南条時光殿が熱原法難の時に多くの方々を護られたことは、本当に有り難いという意味で、「此はあつわらの事のありがたさに申す御返事なり」と認められているのであります。そして、大聖人様は南条時光殿を、

「上野賢人」（同<sup>ツ</sup>）と称賛されております。

また、時光殿の奥さんの法名を「妙蓮」と言いますが、時光殿は妙蓮と共にたくさんの御供養をしております、熱原の法難のあとも、幕府の弾圧が続き、生活も非常に厳しいなか、多くの子供を育てながら、大聖人様や日興上人に御供養を続けられたのであります。

また、日興上人が身延を離山された時には、時光殿は進んで自領である上野の地にお迎えし、大石ガ原を寄進して、今日の大石寺の基礎を作ったのであります。

このように南条時光殿は、権力や迫害にも屈せず、大法広布のために信心を貫いた方でありまして、まさに信徒の鑑かがみとされている方でありまして。そのことは、大聖人様から三十数通もの御書を頂戴していることから判るのであります。

特に、総本山におきましては毎年五月一日の南条時光殿の祥月命日に、客殿において「大行会だいぎょうえ」を修したあと、総本山としてお墓参りをしております。これは今日まで、ずっと続いていることであり、それだけ時光殿の功績は、たいへん大きなものであります。

さて、ただいま拝読いたしました御書でありますけれども、まず、その冒頭を見ますと、大聖人様がこれまで値われた法難のなかで、竜口の頸の座と、東条小松原の法難ほどの大難はないと仰せです。つまり、大聖人様は色々な難をお受けあそばされましたけれども、命を捨てるほどの大きな難がこれらであったと仰せられているのです。

つまり、竜口の法難というのは、文永八（一二七一）年九月十二日に、大聖人様が鎌倉の竜口の頸の座で斬首刑に処せられようとした事件であります。

その法難の発端は何かと言いますと、これは、大聖人様との祈雨きうの勝負に負けた極楽寺良観が、幕府の要人やその奥さん方に取り入って、様々な画策をしたのであります。そして、これを受けて平左衛門尉頼綱よりつなが、武装した数百人の兵を連れて大聖人様がおられる松葉ヶ谷やつの草庵を襲い、大聖人様を捕らえたのであります。この時に同行した平左衛門の家臣しやうに少輔房という者がおりまして、これが大聖人様の懐中から法華経の第五の巻を奪い取り、その経巻で大聖人様の頭こうべを三度にわたって打ち据えたということでありまして。

この第五の巻には、末法に法華経を弘通するならば刀杖の難に値うことが説かれている勸持品第十三が収められているのです。

御承知のように法華経は、卷子本と言いまして、巻物にすると全部で八巻あるのです。そのうちの第五の巻に勸持品が入っており、そこに三類ごうてきの強敵による迫害が説かれているのですが、この第五の巻をもって大聖人様の頭を打ち据えたのであります。まさに、末法に法華経を弘通するならば刀杖の難に値うと説かれている勸持品の巻軸で頭を打たれたことによって、大聖人様は身をもって法華経の経文を実証されたのでありまして、大聖人様も、この難によって、まさしく法華経しんどくを身読した、法華経を身体で読んだとおっしゃっているのであります。

さて松葉ヶ谷の法難のあと、大聖人様の身柄み がらは一時、北条宣時の館のぶときに預けられまして、幕府は全くなんの取り調べもないまま、深夜、隠密裏に竜口の刑場に連れ出して、大聖人様の頸を斬ろうとしたわけでありまして。

その途中、大聖人様は鶴岡八幡宮の前で立ち止まられ、八幡大菩薩に対して「法華経の行者を、なぜ守護しないのかと」と叱咤しったされたのであります。そのあと、大聖人様は四条金吾の所へ使いを走らせて、急を知らせたのであります。それを聞いて駆けつけた四条金吾は、殉死じゆんしの覚悟で大聖人様のお供をしたのであります。

そして、刑場に着かれた大聖人様は悠然と題目を唱えて、頸の座に着いたのであります。しかし、まさに役人が大聖人様の頸を斬ろうとした時に、江ノ島の方より光りたる物が飛んできたのです。

この光りたる物が何かというと、大聖人様は、日・月・衆星の三光天子のうちの月光天子であると示されております。この月光天子が、まさに太刀取りたちが大聖人様の頸を刎ねようとした時に現れて、結局、太刀取りは大聖人様の頸を斬ることができなかったのです。多くの者はひれ伏し、馬から落ちる者、遠ざかる者等もいたのであり、このことは『種々御振舞御書』（御書一〇五九頁）に詳しく出ておりますから、お帰りになったら、是非、拝読しておいてください。

そのようにして大聖人様は難を逃れたのでありますが、これはまさに大聖人様が八幡宮へ立ち寄って、「今まさに法華経の行者が難に値わんとしている時に何をしておるのだ」と諸天善神を叱咤したことにより、三光天子のなかの月光天子が現れて、大聖人様を守護せられたということなのです。

そのあと、大聖人様は依智（現在の神奈川県厚木市）の本間六郎左衛門の屋敷に預けられ、佐渡はいるに配流されたのであります。

もう一つ忘れてはならないことは、竜口の法難というのは、実は御法門・御法義の上からも大事な意味がありまして、『開目抄』に、

「日蓮といふし者は、去年九月十二日子丑ね うしの時に頸はねられぬ。此は魂魄佐土の国にいたりて、返る年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。みん人、いかにをぢぬらむ」（同 五六三頁）

とおっしゃっております。これはすなわち、発迹顕本あそばされたということでありまして、ここに「魂魄」と仰せられた意味は、久遠元初自受用身としての魂魄であり、大聖人様はこの竜口の法難において、凡夫としての迹はらを發って、久遠元初自受用身の本仏としての御境地を顕されたのであります。

それから、もう一つ挙げられている小松原の法難は、文永元（一二六四）年の秋に大聖人様のお母様が危篤になられ、その知らせを受けた大聖人様は、十二年ぶりに故郷の安房あわ（現在の千葉県）にお帰りになるのであります。

大聖人様は、まさに母君が臨終の状態にあったところへ帰られると、当病平癒の御祈

念をあそばされたわけです。そして『可延定業御書』に、

「日蓮<sup>はは</sup>悲母をいのりて候ひしかば、現身<sup>げんしん</sup>に病をいやすのみならず、四箇年の寿命<sup>延</sup>をのべたり」(同 七六〇<sup>三</sup>)

とおっしゃっておりますように、大聖人様の御祈念によってお母様が病を快復し、そのあと四カ年の寿命を延べられたのであります。

その後も大聖人様は安房の地に留まって、妙法弘通に専念されていたのでありますが、大聖人様の帰郷を聞いた篤信の信徒で天津<sup>あまつ</sup>の領主である工藤吉隆殿が、大聖人様を我が家にもと来臨を請うたのであります。そこで、大聖人様は十一月十一日に、十数人のお供を連れて工藤殿の館に向かわれたのでありますが、これを知った地頭の東条景信が襲ってきたのです。

この東条景信は、大聖人様が初転法輪、つまり南無妙法蓮華経と清澄寺で初めて唱えられた時に、怒り心頭に発して大聖人様に襲い掛かろうとした者です。景信は念仏者で、大聖人様を念仏の敵と思っておりましたから、かねがね大聖人様に対して恨みを持っていたのです。そこに、大聖人様が安房に来られて、工藤の館に来るということを聞きつけたことから、大聖人様の一行を襲ったわけであります。

すなわち、夕刻になって大聖人様の一行が小松原に通り掛かった時、武器を持った数百人の念仏者を率いて、東条景信が大聖人様の一行を襲ったのであります。大聖人様の弟子達も、すぐさまそれに応じましたが、多勢に無勢でありまして、弟子の鏡忍房、それから工藤吉隆殿が殉死したと言われております。また、大聖人様御自身も東条景信の太刀によって右の額<sup>ひたい</sup>に深手の傷を負われ、さらに左手を打ち折られるという、まさに命に及ぶ大難<sup>こうむ</sup>を被られたわけであります。

この時の様子について『南条兵衛七郎殿御書』には、

「十一月十一日、安房国東条の松原と申す大路<sup>あわのくに</sup>にして、申酉の時、数百人の念仏等<sup>おおじ</sup>にまちかけられ候ひて、日蓮は唯一人、十人ばかり、ものゝ要<sup>さるとり</sup>にあふものわづかに三四人なり。いるやはふるあめのごとし、うつたちはいなづまのごとし。弟子一人は当座にうちとられ、二人は大事<sup>手</sup>のてにて候。自身もきられ、打たれ、結句にて候ひし程に云云」(同 三二六<sup>三</sup>)

とおっしゃっております、この時に東条景信より被った傷が残ったということであります。

さらに『上野殿御返事』を見ますと、法華経の第五の巻で大聖人様<sup>ちようちやく</sup>を打擲した少輔房について、

「ついには日蓮にあひて仏果をうべきか」(同 一三五九<sup>三</sup>)

と仰せられております。つまり、大聖人様に対して打擲したその者が、のちのちには仏果を得る、すなわち成仏するだろうとおっしゃっているのです。

これは非常に大事なことでありまして、このことにつきましては、この御書のなかに、

法華經を踏みつけた女人が、逆縁によって救われたことを示されております。つまり、  
どういうことかと言いますと、妙法蓮華經に縁した因縁によって救われるのだから、順  
縁・逆縁とありますが、順縁の人は当然ながら、逆縁の人もまた成仏するということが  
おっしゃっているのです。

御書のなかには、このように書かれております。

「天竺てんじくに嫉妬しつとの女人あり。男をにくむ故に、家内の物をことごとく打ちやぶり、其その  
上にあまりの腹立はらだちにや、すがたけしきかわり、眼は日月の光のごとくかがやき、くち  
は炎をはくがごとし。すがたは青鬼・赤鬼のごとくにて、年来男のよみ奉る法華經の  
第五の巻をとり、両の足にてさむざむ散 散にふみける。其のちの後命つきて地獄隨にをつ。両の  
足ばかり地獄入にいらす。獄卒鉄杖ごくそつをもってうてどもいらす。是は法華經をふみし逆縁  
の功德による」(同 一三五八ノ)

と仰せです。

解りやすく言うと、インドに住む嫉妬深い女の人がいて、亭主を憎むばかりに家中の  
物をすべて壊し、そのうち亭主が読む法華經をも憎くなって、その法華經を足蹴あしげにして  
しまうのです。そして、その女人は亡くなると当然、地獄に墮ちるのだけれども、法華  
經を足蹴にしたその足だけは、いくら獄卒が地獄に墮とそうとしても墮ちなかった、と  
いう話です。これが、まさしく逆縁の功德なのです。

よく「縁なき衆生は度し難し」と言いますように、縁に触れるということが非常に大  
事であり、このことをここにおっしゃっているのです。

これは、私達の折伏にも非常に参考になります。とかく折伏というと、「あの人は言  
ってもだめだ」などと勝手に決めて、折伏をしない例があるのだけれども、それではい  
けないのです。逆縁でも成仏するのですから、何しろ「日蓮大聖人様の仏法は正しい」  
ということを多くの人に下種していく必要があるのです。

たとえ、その時に相手が反対しようが、それがまた逆に縁となって、のちのちに入信  
するに至ることがあり、さらに成仏していけるわけです。法華經を足蹴にした足だけが  
地獄に入らなかったというのは、そのことを示しているのです。

ですから折伏とは、それこそ縁のある方、多くの人に、大聖人様の仏法の正しさを伝  
えていくということです。そのためには、色々なことがあります。しかし、それがまた  
一つの大きな縁になるのです。

実際に、そういったケースがありました。私が法道院にいた時に聞いた話であります  
けれども、折伏して十年ぐらい経ってから、突然その人がお寺に来た、という話があり  
ました。そういうものなのです。ですから、私達が凡智凡眼でもって勝手に「あの人は、  
いくら折伏してもだめだ」と決めてしまう人がいるとすれば、それは間違いです。どん  
な人にでも、堂々と話をすべきです。

これもいつも私が申し上げていることだけれども、先年、台湾に行った時に、台湾で

現地の方が私達を総統府へ案内してくれたことがありました。その時に、現地の局長さんがわざわざお出迎えくださりまして、私ともお話をしたわけです。私も御礼を申し上げて、そして次に私はほかの方とお話ししている時、台湾の女性のメンバーの方がその局長さんと一生懸命に話をしているのです。私がそばの人に「あの方々は何を話しているのですか」と聞きましたら、その女性が局長さんを、その場で折伏していると言うのです。

私は、台湾の折伏のパワーのすごさを感じました。チャンスと見れば、どんな所であろうと、あるいはまた相手がどういう方であろうと、けっして非常識に行うのではなくして、そういうチャンスがあれば、ちゃんと折伏しているのであります。私と話をしたそのあとに、そのように折伏をしている。なるほど、折伏というのはそうでなければならぬと感じました。

しかし、だめなケースというのは、自分で勝手に判断してしまうのです。あの人はだめだと決めつけて、折伏をしない。それではだめです。どんな人にでも、チャンスがあれば下種結縁していくことが大事です。今言った、法華経を足蹴にした縁で成仏できたという話のように、本当に大きな逆縁成仏の功德があるのですから、これから折伏するに当たっては、こういったことを一人ひとりがしっかりと心掛けて行じていくべきだと思います。

さて、御書ではこのあと、第五の巻に収められている各品の内容について、その意義を述べられております。

まず、提婆達多品にある提婆達多と童女の成仏について触れられて、

「逆順ともに成仏を期すべきなり。是提婆品の意なり」(同 一三六〇鈔)

と仰せられて、五濁乱漫の末法の衆生が救われる法理を、ここで示されているのであります。つまり、順逆二縁共に救っていくということでありませう。

次に、勸持品について触れられて、同品に説かれている刀杖の難に関して、過去の聖人などの例を引かれ、法華経の第五の巻の勸持品を身口意の三業で読み、実践したのは、日蓮大聖人様ただ一人であると断言されております。

そして、次の涌出品については、大聖人様こそが上行菩薩等のなすべき末法の妙法弘通を実践していることを述べられております。

少し長くなりましたが、以上がこの『上野殿御返事』の内容であります。

それでは、本文に入ります。

まず「**かつへて食をねがひ、渴して水をしたうがごとく、恋ひて人を見たきがごとく、病にくすりをたのむがごとく、みめかたちよき人、べにしらいものをつくるがごとく、法華経には信心をいたさせ給へ。さなくしては後悔あるべし云云**」とあります。先程も言いましたように、テキストに載せた第六番と第七番が『上野殿御返事』の本文であるのに対し、この御文は同抄の追伸であります。

通積しますと「飢えた時に食べ物<sup>う</sup>を求め、喉<sup>のど</sup>が渴いた時には水<sup>かわ</sup>をほしがるように、恋しい人を見たいように、病気の時には薬を頼むように、美しい人が紅<sup>べに</sup>や白粉<sup>おしろい</sup>をつけるように、法華經の信心をしていきなさい。そうでなければ後悔することになるでしょう」とおっしゃっておりまして、これは信心の在り方について、譬えをもって解りやすく説かれております。

つまり、ある時だけ、むやみに力<sup>りき</sup>んで信心をするけれども、それが過ぎればパッと信心をやめてしまうような信心ではいけませんよということで、滔々<sup>とうとう</sup>として絶えることなく持続していく信心、御本尊に対する絶対的<sup>ぐ どうしん</sup>確信からおのずと出てくる一途な求道心が大事であることを、ここではおっしゃっているのであります。

我々の信心を、よく「火の信心」と「水の信心」に譬えますね。これは『御講聞書』に、

「仰せに云はく、総じて此の經を信じ奉る人に水火の不同有り。其の故は火の如きの行者は多く、水の如きの行者は希<sup>まれ</sup>なり。火の如しとは、此の經のいわれを聞いて火炎のもえ立つが如く、貴く殊勝<sup>しゅしょう</sup>に思ひて信ずれ共<sup>ども</sup>、臆<sup>やが</sup>て消え失ふ。此は当座は大信心と見えたれ共<sup>ともしび</sup>、其の信心の灯<sup>ともしび</sup>消ゆる事やすし。さて水の如きの行者と申すは、水は昼夜不退に流るゝなり。少しもやむ事なし。其の如く法華經を信ずるを水の行者とは申すなり」(同 一八五六)

とあるように、我々の信心は、まさに滔々と流れて、やむことなき不退の信心が肝要であります。

何かに奮起して、火が燃え立つように一生懸命、頑張ったかと思えば、少しすると火が消えたように何もしなくなる。そういう信心ではだめだ、とおっしゃっているのです。

とはいえ、爆発することのない信心もまた、これはだめなのです。つまり、眠ったままの信心であったり、折伏しているのか、していないのかも判らないような、そういうダラダラした信心では話にならないのであります。ですから、そここのところは、しっかりメリハリをつけて、信心をしていく必要があるのであります。

また『妙一尼御前御返事』には、

「夫<sup>それ</sup>信心と申すは別にはこれなく候。妻のを<sup>夫</sup>とこをおしむが如く、をとこの妻に命をすつるが如く、親の子をすてざるが如く、子の母にはなれざるが如くに、法華經・釈迦・多宝・十方の諸仏菩薩・諸天善神等に信を入れ奉りて、南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心とは申し候なり。しかのみならず『正直捨方便、不受余經一偈』の經文を、女のか<sup>鏡</sup>み<sup>を</sup>をすてざるが如く、男の刀をさすが如く、すこしもす<sup>捨</sup>つる心なく案じ給ふべく候」(同 一四六七)

と仰せになっております。

つまり、我々の日常の生活のなかで、信心が特別な形で存在しているのではなく、ごく自然な形で生活のなかに溶け込んでいる状態が大事なのです。ですから朝、起きたら



勤行を習慣として、ごく自然に行うことができるか。また、学校とか会社から帰った時には、まず御本尊様の前に座り、南無妙法蓮華経とお題目を唱えて御挨拶をすることが、生活のなかで習慣として行えるか。

朝夕の勤行をはじめ、家を出る時や帰ってきた時に、まず御本尊様に手を合わせて「行ってまいります」とか「ただいま帰りました」と御挨拶をする。それが生活のなかに、自然に溶け込んでいることが大事だと、ここでおっしゃっているのです。

ごく自然な形で御本尊様を渴仰していく信心、これが極めて大事なのです。もちろん、燃え立つことがない信心でも困るのだけれども、そのように生活と同化した信心をしていくことが、たいへん大事だということでもあります。

よって大聖人様は、ここで「女のかゞみをすてざるが如く、男の刀をさすが如く、すこしもすつる心なく案じ給ふべく候」と、我々の信心の姿勢をかくあるべきであると御教示あそばされているわけでありますから、このことを我々は、普段の信心のなかで重々、心掛けていくべきであろうと思うのであります。

次に、テキストの九番目に入ります。

## 9 上野殿御返事

法華経は草木を仏となし給ふ。いろうや心あらん人をや。法華経は焼種の二乗を仏となし給ふ。いろうや生種の人をや。法華経は一闍提を仏となし給ふ。いろうや信ずるものをや。(御書一三八〇鈔一行目)

この九番目の『上野殿御返事』は、先程の『上野殿御返事』とは別の御書であります。

この『上野殿御返事』は、弘安二（一二七九）年八月八日、大聖人様の御年五十八歳の時に、同じように南条時光殿へ送られた御書でありまして、お金、塩、芋などを御供養されたことへの御礼の返書であります。そのなかでは、御供養の品々が、身延の山中にお住まいの大聖人様にとって、いかに大切な物かを教えられ、その功德によって時光殿は成仏すること疑いないと説かれております。

さて、この御文の少し前に、

「摩男 積まんと申せし人のたな心には石たま変じて珠となる。金こんぞく王は沙いさごを金こがねとなせり」  
(御書 一三八〇鈔)

と仰せられています。すなわち、石を宝石に変えたしゃくまなん 釈摩男、あるいは砂を黄金に変えたこんぞくおう 金粟王の譬えを挙げられて、法華経は草木などの非情や、成仏の種子を焼いてしまったとされる二乗、さらには仏法に縁なき一闍提をも成仏させるとおっしゃっております。

なかでも、一闍提というのは断善根、善根を断ってしまった人という意味で、絶対に成仏しないと言われている人達です。あるいは「信不具足」とも訳し、正法を信ぜず、

しかも、もともと悟りを求める心がないような人達で、成仏する機縁を持たない衆生を一闍提と言うのです。しかし、この不信の固まりのような衆生ですら成仏させる力が、この妙法にはあることをお示しなのであります。

それと同時に、草木と異なって心があり、あるいは二乗と違って成仏の種子を有し、しかも一闍提と異なって法華経を熱心に信じているあなたは必ず成仏をいたしますよと、大聖人様はおっしゃっているのです。

我々も皆、そうなのです。我々は二乗ではありません。一闍提人でもないですね。ですから、我々は必ず成仏できる。ただし。

「御信心により候べし」(同 一五一九<sup>ノ</sup>)

ですから、信心が弱くなってしまってはだめです。信心が強盛ごうじょうであれば、すべての人は、どんな人でも必ず成仏をするのです。

すべての方々に仏性があります。「一切衆生悉有仏性」といって、どんな人でも必ず仏性があるのです。ですから、仏性がある限り、この御本尊様の縁に触れれば成仏できるのです。しかし、この縁に触れなければ、どんなに仏性があるといっても、その仏性が仏性としての用はたらきをしないから、成仏はできません。だから、一切衆生悉有仏性ということに安心してはだめなのです。

やはり、大聖人様の御本懐たる本門戒壇の大御本尊の縁に触れてこそ、仏性が仏性として開かれていくのであり、このことが大切なのです。そして、その縁を結んでいくのが下種折伏です。

だから、どんな人でも救っていけます。もともと衆生には仏性があるのですから、あとは、この御本尊様と縁を結ぶ、結縁すればいいのです。それが我々の折伏です。一人ひとりの折伏は地道な戦いであるかも知れませんが、それが大きな力になるということ、よく御承知いただきたいと思います。

また、ここに挙げられている草木成仏とか二乗作仏、あるいは一闍提成仏ということは、爾前経では全く説かれていない教えです。だいたい爾前経では、草や木は絶対に成仏をしないとされました。あるいはまた、二乗は絶対に成仏をしない。先程言った一闍提人も、絶対に成仏しないとされてきました。それが、法華経で初めて成仏が許されたのです。ここに、法華経の功德力の大きさが示されているのであります。

さて、草木成仏とは何かと言いますと、草木や国土などの非情、つまり草や石ころなどには心がないと世間の人は考えておりますが、それらの非情も成仏するということ、法華経では説いているのです。これはまことにすごいことでありまして、その草木成仏の実義は何から起きているかと言え、一念三千の法門によるのであります。

つまり一念三千は、十界が互具ごぐして百界、その百界に十如是が具わって千如是、その千如是の一々に、五陰世間・衆生世間・国土世間の三世間が具わって三千という法数を成ずるわけですが、このうち五陰世間と衆生世間はまだ解りますが、国土世間もまた、

この一念三千のなかに入っているのです。これが法華經における極めて大事な御法門でありまして、『総在一念抄』にも、

「此の一念三千の不思議は国土世間に三千を具するが故に、草木瓦石も皆本有の三千を具して円満の覚体なり」(同 一一三〇)

と仰せられ、草や木も、あるいは瓦や石も全部、本有の三千を具して円満の覚体であると、すなわち成仏することができるとおっしゃっています。つまり、有情と、非情の草木国土との互具互融が明かされ、非情の草木国土も有情と同じように成仏をする、つまり有情の成仏は即、非情の成仏になるとおっしゃっているのであります。

ですから『草木成仏口決』には、

「我等一身の上には有情非情具足せり。爪と髪とは非情なり、きるにもいたまず、其の外は有情なれば切るにもいたみ、くるしむなり。一身所具の有情非情なり」(同 五二三〇)

と仰せられ、我々自身の身体のなかに有情と非情の両方があると示されております。つまり、爪や髪の毛といったものは、切っても痛くはないから非情に属し、肌などは、つねれば痛いし、切ったら血が出てきますから、これは有情だと仰せられているのであります。

さらに、妙楽大師は『金剛鉾論』に、華嚴の澄観が立てた、非情には仏性がないとの説を破折して、

「一草・一木・一礫・一塵、各一仏性・各一因果あり縁了を具足す」(同 六四六〇等)

と示され、どんなものにも必ず仏性は存在することを、はっきりとおっしゃっているのであります。

さらに、このことを日寛上人は『観心本尊抄文段』に、

「この妙楽大師の文は『性得の三因仏性』を示しており、『各一仏性』とは正因仏性を指し、一念三千即中の辺をもって正因仏性と名づけるのである。この三千即中の正因仏性の体において、三千即空・三千即仮の用を具足するが故に、三千即仮は縁因仏性を、三千即空は了因仏性を顕しているのである」(御書文段 二一三〇取意)

と御指南されております。

つまり、一本の草、一本の木、一つの礫、一つの塵など、すべてのものに皆ことごとく仏性が具わっており、仏性は有情・非情にわたっているのだと説かれているのです。すなわち非情も、有情と同様に成仏するとおっしゃっているのであります。

ですから、天台大師は『摩訶止観』に、

「一色一香も中道に非ざる事無し(一色一香無非中道)」(学林版止観会本上 五五〇)

と仰せであります。この「一色一香」とは法界全体、あるいは森羅万象すべてという意

味ですが、それらは皆、中道にあらざることなし、すなわち仏道にあらざるものなしと仰せられているのであります。つまり、どんなものでも必ず成仏するとおっしゃっているのです。

「三因仏性」について申しますと、まず正因仏性というのは、一切衆生が本然的に具えている仏性のことで、法性<sup>ほっしょう</sup>とか真如と表現されるものであります。また了因仏性とは、法性・真如の理を照らし顕す智慧のことであり、縁因仏性とは、了因仏性を縁助して正因仏性を開発していくところの、すべての善行を言います。まさに、すべてのものに仏性があるのであり、草木も成仏をすることを説かれているのです。

ですから、先程も言ったように、私達の身体でも、顔をつねれば痛い、これは有情です。髪の毛は切っても痛くない、これは非情ということです。そのように、我々の身体は有情と非情の両方が凝縮して存在しているのであり、宇宙法界もまた、そういう関係にあるということです。

また、二乗作仏ということではありますが、これは法華經に来て初めて明かされる御法門です。

爾前権經では「焼種<sup>しょうしゅ</sup>の二乗」と言われておりました。どんな植物でも、種を焼いてしまえば、それを蒔<sup>ま</sup>いても芽は出ません。そのように、二乗は仏性の種子を焼いてしまったような存在だから永久に成仏できないと言われ、嫌われてきたのであります。ところが、法華經においては十界互具一念三千の御法門が説かれて、二乗も成仏できることが明かされたのです。

故に『聖愚問答抄』には、

「一代聖教<sup>しょうぎょう</sup>の骨髓たる二乗作仏・久遠実成は今經に限れり」(御書 三九四頁)というお言葉があります。つまり、法華經に来て初めて、二乗作仏が明かされたということです。

では、この声聞・縁覚の二乗は、なぜ成仏できないとされたかという、要するにひとりよがり、化他がないのです。ですから、いくら法を聞いても、本当の成仏というものが無いわけです。

やはり、自分だけの信心、自分だけの幸せを求める信心というのは「二乗根性」と言われて、嫌われるでしょう。だから我々も、自分だけではなくして、多くの人々を救っていくことが大事で、折伏をすることによって、我々もまた救われていくのです。折伏というのは、自分の過去遠々劫<sup>おんのんごう</sup>の罪障を消滅して、真の幸せを掴<sup>つか</sup>んでいくための大切な修行なのであって、やはり一人だけの信心ではなくして、多くの人を救っていくという、その精神が絶対に必要なのです。

そもそも、仏様がなぜ、この世の中に出現せられたかという、一人でも多くの人を救うためであります。大聖人様の御出現も、その通りです。大聖人様の御意を拝した時に、我々もまた、大聖人様と同じように、折伏逆化に努めていかなければならない。そ

ここに本当の即身成仏、幸せになれる原理が存しているのです。

これを忘れてしまって、独りよがり「私は毎日、何時間もお題目を唱えているから大丈夫だ」と言う人がいたとすれば、けっして大丈夫ではありませんよ。自行化他ですから、折伏をしっかりとやっていくことが大事であります。もちろん、お題目を唱えていれば、何もしない人よりはいいです。けれども、それだけでは、やはり大聖人様のお心にはかなわないのです。

大聖人様は常々、自行化他ということをおっしゃっております。『三大秘法抄』にも、「正法には天親菩薩・竜樹菩薩、題目を唱へさせ給ひしかども、自行計りにして唱へてきて止<sup>や</sup>みぬ。像法には南岳・天台等は南無妙法蓮華経と唱へ給ひて、自行の為にして広く化他の為に説かず。是理行の題目なり」(同 一五九四)

と仰せのように、自行だけのお題目ではいけません。やはり、化他行をしていかなければ、だめなのです。多くの人を救っていくということは、また自分自身の自行にも役に立っていくのです。

先程の御書にも、二乗作仏と久遠実成は「一代聖教の骨髓」であるとおっしゃっているわけですから、どんな人でも救っていくことが大事であります。

それから、一闡提成仏とは一闡提が成仏をするということでもありますけれども、この一闡提とは、解脱<sup>げだつ</sup>の因を欠き、正法を信ぜず、また悟りを求める心がなく、成仏する機縁を全く持たない衆生を言います。けれども、その極悪の衆生も、二乗の人達と同じように、この法華経において救われることが説かれているのであります。

つまり、法華経において初めて十界皆成<sup>かいじょう</sup>が説かれ、地獄の衆生も、餓鬼の衆生も、すべての衆生が成仏すると初めて説かれたのです。もちろん、そのなかには二乗も含まれますし、一闡提人も含まれます。ですから、この御文から拝せられることは、まさしく、この妙法蓮華経の功德力は、まことに大なるものがあるということです。

このように、妙法には大きな功德があるわけですから、あとは我々が信力・行力を存分に発揮し、我々も成仏をしていくことが大事であります。

次に、十番目の御文を拝読します。

## 10 日女御前御返事

此の御本尊<sup>ただ</sup>も只信心の二字にをさまれり。以信得入<sup>いしんとくにゆう</sup>とは是なり。日蓮が弟子檀那等「正直捨方便<sup>ふじゆよきよういちげ</sup>」「不受余経一偈<sup>むに</sup>」と無二に信ずる故<sup>因</sup>にて、此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり。たのましたのもし。如何にも後生をたしなみ給ふべし、たしなみ給ふべし。穴賢<sup>あなかしこ</sup>。南無妙法蓮華経とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切な<sup>もつと</sup>なり。信心の厚薄<sup>こうはく</sup>によるべきなり。仏法の根本は信を以て源とす。されば止観の四に云はく「仏法は海の如し、唯信のみ能く入る」と。弘決の四に云はく「仏法は海の

如し、唯信のみ能く入るとは、<sup>こうきゅう</sup>孔丘の<sup>ことばなお</sup>言尚<sup>はじめ</sup>信を<sup>な</sup>首と<sup>いわ</sup>為す、<sup>じんり</sup>況んや<sup>じんり</sup>仏法の深理をや。信無くして<sup>むし</sup>寧ろ入らんや。故に<sup>けごん</sup>華嚴に信を道の元、功德の母と為す」等。(御書一三八八<sup>ぎ</sup>一三行目)

この『日女御前御返事』は、弘安二（一二七九）年八月二十三日、大聖人様が御年五十八歳の時に、日女御前に与えられた御書であります。日女御前への<sup>ししよ</sup>賜書は二通ありますが、もう一通は弘安元年六月二十五日の御書であります。

この日女御前については諸説がありまして、池上氏の妻であるとも、松野後家尼の娘であるとも言われておりますが、詳細は不明であります。

ただし、賜書の内容から見ますと、御本尊供養のために種々の御供養を行い、また法華經二十八品の品々ごとの供養を願うなど、信心強盛な人であった様子がうかがえます。また、大聖人様から御本尊の<sup>そうみょう</sup>相貌を明かされまして、法華經要品の<sup>ようほん</sup>義を教示されていることから、身分・学識があり、信心強盛な婦人であったと思われま

す。本抄は、まず日女御前からの御供養についてお礼を述べられたあと、大聖人様の御本尊について、まず正像末に未曾有の御本尊であることを述べられ、次に所説の經と顕現の時期、および能<sup>にん</sup>頭の<sup>にん</sup>人とを挙げて御本尊の相貌を示し、続いて經釈を挙げてその義を示され、御本尊供養の功德、ならびに御本尊の住処とその意義を明かされまして、

「此の御本尊も<sup>ただ</sup>只信心の二字にを<sup>これ</sup>さまれり。以信得入とは是なり」(御書 一三八八<sup>ぎ</sup>)

と、成仏の要諦は「信」であることを説かれ、最後に「五種の妙行」を挙げて本抄を結ばれております。

この御書は、お帰りになりましたならば、ここに挙げた御文だけではなくして、是非、全編を通して、よく拝読しておいていただきたいと思ひます。

それでは、本文に入ります。

初めに「此の御本尊も<sup>ただ</sup>只信心の二字にを<sup>いしんとくにゅう</sup>さまれり。以信得入とは是なり」とお示し

であります。「以信得入」というのは、法華經譬喩品の御文であります。すなわち、譬喩品に、

「汝<sup>なんじ</sup>舍利弗<sup>なお</sup>尚此の經に於ては 信を以て入ることを得たり 況んや余の聲聞をや

其の余の聲聞も 仏語を信ずるが故に 此の經に随順す 己<sup>おの</sup>が智分<sup>ちぶん</sup>に非<sup>あら</sup>ず」(法華經 一七四<sup>ぎ</sup>)

とあります。つまり、智慧第一と言われた舍利弗でさえも信によって得道したことを挙げて、ただ信のみが仏道修行の要諦であり、一切衆生はことごとく、信をもって成仏することができる<sup>と</sup>説かれているのであります。

『御義口伝』に、

「信は智慧の因にして名字即なり。信の外に<sup>ほか</sup>解<sup>げ</sup>無く、解の外に信無し。信の一字を以

て妙覚の種子と定めたり」(御書 一七三八頁)

とお示しのように、智慧の因は信であり、信を貫いてこそ、成仏することができると思われているのであります。

さらに『法蓮抄』には、

「信なくして此の経を行ぜんは手なくして宝山に入り、足なくして千里の道を企つるがごとし」(同 八一四頁)

と仰せられております。

同じような御文としては、『四信五品抄』に、

「問ふ、其の義を知らざる人唯南無妙法蓮華経と唱へて解義の功德を具するや不や。答ふ、小児乳を含むに其の味を知らずとも自然に身を益す。耆婆が妙薬誰か弁へて之を服せん。水心無けれども火を消し火物を焼く、豈覚り有らんや。竜樹・天台皆此の意なり」(同 一一一四頁)

と仰せのように、信こそが成仏得道の要諦であることを、明らかに示されているのであります。つまり、ここには耆婆の例、あるいは赤ん坊が無意識のうちに乳を飲んで、その乳によって養われていくことを挙げて、まさにこれらは自然の姿であるとお説きになっておられますように、信心もそうだということでもあります。

次に「日蓮が弟子檀那等『正直捨方便』『不受余経一偈』と無二に信ずる故に、此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり。たのもしたのもし。如何にも後生をたしなみ給ふべし、たしなみ給ふべし。穴賢」とあります。

「正直捨方便」というのは、法華経方便品の御文であります。すなわち、

「正直に方便を捨てて但無上道を説く 菩薩是の法を聞いて疑網皆已に除く 千二百の羅漢 悉く亦当に作仏すべし」(法華経 一二四頁)

とあります。すなわち、釈尊が四十余年間に説いてきた華嚴、阿含、方等、般若等の経教は方便の教えであって、それらを捨てて「無上道」すなわち、実教たる一仏乗の教えを説く。菩薩達は、この一仏乗の法を聞いて皆、疑網を除き、一千二百の阿羅漢はことごとく成仏することができた、と仰せられているのであります。

また「不受余経一偈」とは、同じく法華経の譬喩品の御文であります。すなわち、

「但樂って大乘經典を受持して乃至余経の一偈をも受けず」(同 一八三頁)

とあるなかの「大乘經典」とは法華経であり、「余経の一偈」とは爾前権経のことです。つまり、法華経のみを信じて、それ以外の一切の經典を信じてはならない、とおっしゃっているのです。

そして「此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり」とあるなかの「宝塔」とは、法華経の見宝塔品に説かれるところの、地より涌出した多宝塔のことです。

大聖人様は『御義口伝』に、

「宝とは五陰なり、塔とは和合なり、五陰和合するを以て宝塔と云ふなり。此の五陰

和合とは妙法の五字なりと見る、是を見とは云ふなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は見宝塔なり」(御書 一七五二)

と仰せられています。さらに『阿仏房御書』を拝しますと、

「南無妙法蓮華經ととなふるものは、我が身宝塔にして、我が身又多宝如来なり。妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目宝塔なり、宝塔又南無妙法蓮華經なり」(同 七九二)

と仰せの如く、大聖人様は宝塔を御本尊として顕されたのであります。

つまり、正直に方便を捨てて、余經の一偈をも受持せず、御本尊を無二に信ずることによって、我ら自身もその御本尊の宝塔の中に入ることができると仰せられているのであります。

ですから「南無妙法蓮華經とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切なり。信心の厚薄によるべきなり」とおっしゃっておられますように、御本尊の宝塔には、信心がなければ入ることができません。つまり、成仏・不成仏は、ひとえに信心の厚薄によるのです。よって、信心強盛に南無妙法蓮華經とばかり唱えて、成仏を期することが肝要であると仰せなのであります。

そして「仏法の根本は信を以て源とす。されば止観の四に云はく『仏法は海の如し、唯信のみ能く入る』と」とありますが、これは仏法は信を本とすることを示され、次に天台大師の『摩訶止観』の第四の「仏法は海の如し、唯信のみ能く入る」との文を挙げて、これを立証されているのであります。

これはどういうことかと言いますと、仏法の根本は信だということをおっしゃっているのですが、たしかに仏法は、海の如く無限の広さと深さを持っております。ですから、一見すると仏法の海には、どこからでも入れるように思ってしまう。けれども、それは間違いで、実は、仏法の海に入るには信心という入り口しかないのだと、天台は言っているのであります。

つまり、宗教あるいは仏教から信心を取ってしまえば、それは宗教でもなく、仏教でもなく、単なる理論に過ぎないのです。単なる理論では、人々は絶対に幸せになれません。仏の教え、宗教というものは、そういうものではないのです。ですから、信心が大切なのです。

では、信心とは何かといえ、これは実践です。信心というのは理論ではなく、まさしく実践するから信心と言うのです。信心、信心と、いくら頭でつかに言葉で言っても、それだけでは成仏できません。やはり、実践して初めて、成仏できるのです。

次は「弘決の四に云はく『仏法は海の如し、唯信のみ能く入るとは、孔丘の言尚信を首と為す、況んや仏法の深理をや。信無くして寧ろ入らんや。故に華嚴に信を道の元、功德の母と為す』等」と、先に天台大師の『摩訶止観』の文を挙げられましたが、その文を釈された妙楽大師の『摩訶止観輔行伝弘決』の文を挙げて、仏法においては



信が根本であることを重ねておっしゃっているのです。

すなわち、妙楽大師の『摩訶止観輔行伝弘決』の第四には、「『摩訶止観』に『仏法は海の如し、唯信のみ能く入る』とあるが、外道の儒教を説く孔子でさえも、信ずることを第一にしている。まして仏法の深い真理は、信がなくして、どうして入ることができようか。故に、華嚴経には『信は道の元であり、功德を産む母である』と説かれている」と仰せられているのであります。

また、当抄のこのあとの御文には、

「弘の一に云はく『円信と言ふは理に依って信を起す、信を行の本と為す』云云。外典に云はく『漢王臣の説を信ぜしかば河上の波忽ちに氷り、李広父の讐なりと思ひしかば草中の石羽を飲む』と云へり。所詮天台・妙楽の積分明に信を以て本とせり。彼の漢王も疑はずして大臣のことは信ぜしかば立つ波こほりて行くぞかし。石に矢のたつ、是又父のかたきと思ひし信の故なり。何に況んや仏法においてをや」(同一三八九)

と仰せであります。ここには、外典の例を二つ挙げられております。

一つは、後漢の初代皇帝である光武帝が、まだ一武将であった時に、戦いに敗れて逃走するわけではありますが、敵に追われて最後、河っ淵まで追い詰められたのです。その河を渡らなければ敵から逃げることができないので、進退が窮まってしまったのですが、その時に臣下の王覇が光武帝に「河が凍っている」と報告し、王もその言葉を信じたがために、河上の波はたちまち氷結して、全軍が渡ることができたのであります。

実際には、前日には河は凍っていなかったけれども、当日、行ってみたら、河が凍っていたという話です。これが外典のなかに記されているのですが、これは信ずることの強さを言っているのであります。

もう一つは、皆さん方も知っておられる李広將軍の話です。これは石虎將軍とも言いますが、李広將軍が虎に殺された父親の復讐のために、草陰に隠れて虎が来るのを待っていた。そこに虎がやってきたので矢を射ったところ、その矢は虎に命中した。そして、駆け寄って見たところ、それは虎ではなく、石だったというのです。そのあと、何度かその石に矢を射ったのですが、石に矢が立つことはなかったという話です。

これは、信念力によって、なんでもできるということをおっしゃっているのであります。つまり、光武帝は臣下の言葉を疑わずに信じたために、それまで波の立っていた水面がたちまちに凍ってしまったのです。あるいは、李広將軍の石に矢が立ったのも、父の仇と信じた一念の強さによって、いわゆる「一心、岩をも通す」ことになったのです。だから、仏法においてはなおさらのこと、強盛な信が大事であるということをおっしゃっているわけであります。

『御義口伝』にも、

「此の本法を受持するは信の一字なり。元品の無明を対治する利劍は信の一字なり。

無<sup>む</sup>疑<sup>ぎ</sup>曰<sup>わつしん</sup>信<sup>これ</sup>の<sup>これ</sup>積<sup>これ</sup>之<sup>これ</sup>を思ふべし云云」(同 一七六四頁)

と仰せられております。元品の無明という煩惱の根本を打ち破るのは信じかないのであり、まさに無疑曰信、疑い無きを信と曰うとある、この信の一念こそが最も大事であると、ここでお示しなのであります。

我々の信心においても、自行化他の両面にわたってそうです。

朝夕の勤行をはじめ、普段の様々な会合などでみんな、お題目を唱えますね。その時の信心の姿、御本尊様に対する無疑曰信の絶対信、この信念が必ず通ずるのです。

折伏もそうです。この人をなんとかして折伏する、この人をなんとしても幸せにするという、その一念信の強さというものが、まさに凍るはずのない河を凍らせ、立つはずのない石に矢を立てるようなことを起こすのです。

この信の強さが、我々の信心にとっては極めて大事です。この信念力をもって、本年の折伏誓願達成に向かって、是非、精進していただきたいと思います。

御承知の通り、法華講員五〇パーセント増の期限は来年の三月八日、日興上人の御生誕の日であります。三月八日ですから、実質的に来年は一月と二月しかないわけです。ですから、残りの日数は本当に、あとわずかしかなかった。

けれども、本当に全国の法華講衆が僧俗一体となって折伏に励むならば、この半年で必ず目標は達成できます。できないはずはないのです。やれば、できるのです。

「為<sup>な</sup>せば成る 為<sup>な</sup>さねば成らぬ 何事も 成らぬは人の 為<sup>な</sup>さぬなりけり」とあるように、必ずできるのです。

大聖人様はなぜ、光武帝や李広將軍の故事を引かれて、凍るはずのない河が凍る、あるいは立つはずのない石にも矢が立つということをおっしゃったのか。これは、信というものがいかに尊いか、つまり我々一人ひとりが無疑曰信の信心に立って、信心強盛に努めなければならないことを、その例として示されておられるわけです。

折伏もそうです。広宣流布の戦いもそうなのです。本日、来ている四千人の方々一人ひとりが、本当に信念力をもって戦ってごらんください。皆さん自身がまず、変わりますよ。そして、皆さん方の周りの人が変わりますよ。そうすれば、講中が変わります。講中が変われば、それが必ず大きな力となり、大きなうねりとなってきますよ。

皆さん方には是非、本日お帰りになったら、今日から広宣流布の戦いに参加して、広宣流布の大きなうねりの基<sup>もと</sup>をお作りいただきたいと、心からお願いをする次第であります。

皆さん方の御健闘を心からお祈りいたしまして、本日の講義を終了いたします。